

京都 平安神宮に『シャシャンボ』の記載がありました



南の神苑(平安の苑)/みなみのしんえん(へいあんのその)

この神苑は、明治28年平安神宮創建以来八重紅枝垂桜(やえべにしだれざくら)の名所として親しまれてきた。昭和44年孝明天皇百年祭の記念事業として、平安時代の特色である野筋(道筋)と遣水が設けられた。また、昭和56年には往時の代表的文学書(竹取物語・伊勢物語・古今和歌集・枕草子・源氏物語)に登場する草木、約180種類を植栽して、王朝文化をしのばせる庭『平安の苑』とした。

野筋/のすじ

野の道筋を模して庭に設けた道

遣水/やりみず

平安時代の寝殿造(しんでんづくり)において、外から引き入れて庭園につくった流れ。当時の物語などでは、その流れを引いてつくった池泉のことも遣水とよんでいる。造園意匠としては、平安期から鎌倉期にかけて流行した、曲水(きょくすい)を稲妻形に流した流れをいうが、現存するものはほとんどなく、福岡県の太宰府(だざいふ)天満宮、同横岳崇福寺(おうがくすうぶくじ)のものがあるくらいである。

広辞苑の解説

しゃしゃんぼ【南燭】

ツツジ科の常緑小喬木。関東以西の暖地の山地に自生。高さ1~3m。葉は革質、卵形。6月に長い壺状の白花を総状花序につけ、晩秋紫黒色に熟する液果は甘酸っぱく食用となる。ササンボ。ワクラハ。古名、さしづ。



シャシャンボ つつじ科

古今和歌集18

わくらばにとふ人あらば すま浦に もしほたれつつ わぶとこたへよ、南燭 云々

シャシャンボ

『古今和歌集』新潮日本古典集成の記載

00962

[詞書]田村御時(たむらのおんとき)に、事にあたりて、摂津国(つのくに)の須磨(すま)といふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける

在原行平朝臣(ありわらのゆきひらのあそむ)

わくらばに 問ふ人あらば 須磨の浦に 藻塩たれつつ わぶと答へよ

田村御時

文徳(もんたく)天皇の御代。文徳天皇は、850~58年の8年間在位。御陵が山城の国葛野(かどの)郡田村(今の京都市右京区)にあるところから、「田村帝」と呼ぶ。

事にあたりて

ある事件にかかわりあって。事件の内容は不明だが、「流され」(流刑)ではなく、「こもり侍りける」であるから、自ら都を避けていたのであろう。

こもり侍りける

籠居(ろうきょ)していた時。

宮の内に・・・

宮中に同候していた人。

ひょっとして、あの人はどうしているのか、と尋ねる人があったなら、藻塩が垂れる須磨の浦で、しおたれてわびしく暮らしている、とお答え下さい。

- ・わくらばに たまさかに、稀に、(偶然に、たまたま)
- ・藻塩たれつつ 採集した藻に海水をかけ、それを焼いて塩をとるのが、当時の代表的な製塩法。その際、藻にかけられた海水がしたたりおちるのを、「藻塩たる」と言う。嘆きに沈むの意の「しほたる」を掛けている。
- ・わぶ 寂しくてしょんぼりしている

詞書は「田村の御時(=文徳天皇の時代)に、ある事に関連して、津の国(=摂津の国)の須磨という場所にこもっていた時に、宮中の知人におくった」歌ということ。

神田神社の『シャシャンボ』は・・・



Photo 2021.11.30



Photo 2021.11.30 am7:00



Photo 2021.11.30

ツクバネは 茶褐色になりました



Photo 2021.11.18



Photo 2021.11.30 am7:02



Photo 2021.11.21



弁天社 完成間近



Photo 2021.11.30